

申す社人居置き神祭調い候。御社造営の節は上遷宮下遷宮共神体を守り奉り、開帳の節御戸を開き候事は今に当家より相勤め候。此の神像信仰の輩は火災病難不祥を通れ家内安全諸願成就その靈驗新なる事いちしるしきものならじ。

誠恕謹志 回

月 日

付記 この稿をなすにあたり西郷道胤氏のご指導をうけたことを感謝します。

(平成三年二月九日例会発表)

参考文献

防長寺社由来

書画鑑定 大日本名家全書 (明治四三年刊)

太華案内

都濃郡誌

徳山市史

育英館二代館長波田兼虎と

鳴鳳館長本城紫巖・役藍泉

― 須佐とは二百年も前から文化交流 ―

会 員 清 木 素

波田兼虎の墓碑は「須佐大湫寺の後丘にある。波田家の祖与一兼国は益田家八代(兼宗)兼胤の末子である。秦氏を継いで益田家に仕え、石州波田郷を領したので姓を波田と改めた。十三世太郎右衛門の時益田氏に従って須佐に移る。十八世重内兼厚は宗学兵学に通じ、増野氏の女を娶って三男四女を挙げた。長子貞父、字は与市諱は守節、幼少より学を好んで諸学に長じ、また京都、東都に遊学して武術にも秀で名声高かったが、不幸にして病を得、いまだ家を継がずして宝暦五年四月二十七日没、享年三十才。

次子兼虎、兄早夭により家を嗣ぎ高山(スツギ)(字は子(一編者記))熊(一編者記)といった)と号す。幼くして兄とともに学を修め、十六才萩明倫館山根華陽に師事し、特に儒学・国史・詩文・兵学に長じた。宝暦十四年(一七六四)韓使来朝に際し、滝鶴台に従ってその学士と赤間関に於て交歓し、その博学は彼

の使を驚嘆させたという。益田氏に信任されて政績甚だ多く、また、育英館二代館長として子弟を教育し、多数の英才を輩出せしめた。また「須佐<sup>ササ</sup>邑宰（村長）たり、その詩文は役藍泉（徳山藩学鳴鳳館二代館長）と交わり、切磋琢磨して上達し嵩山文集を著す。天明五年（一七八五）四月一七日病没。享年五一才」。以下兼虎と徳山本城・役との交流の資料を紹介する。

資料1（注1）

役藍泉は「嵩山泰先生之墓」の自然石の墓に没後十年寛政七年（一七九五）二月次のような撰文を残している。

君諱兼虎字士能嵩山其号先出自羸<sup>ウシ</sup>秦氏<sup>シ</sup>帰化我者因称秦氏年祀邈焉顛末難徵有与一兼国者実左近将監益田君兼胤季子也降繼秦氏而仕其家食邑石州波田因改波田氏後十三世太郎右衛門諱堯述者從益田桃林君遷長門須佐邑十八世而重内諱兼厚君者即君考也好澆洛学兼通兵昼娶增野氏三男四女君為其仲其兄諱守節亦以才学夙称不幸早夭君因纂家系而季則出嗣大谷氏君幼穎悟嬉戲必事簡墨稍長授句逗則既能質字義釋文意始如成人然父兄驚嗟称奇兼厚君家法頗嚴不敢仮顔色而君勉厲不倦年甫十六既慶州明倫館師事華陽先生先生亦極嚴厲館下諸生得一乖青為幸而君至則虚左待之於名声籍甚在館数年与我城

子猛俱出館中僑居夷門孤突同爨<sup>サ</sup>以研其業者又一期推澆雀台為主盟宝曆癸未韓使來聘雀台帥諸紳縮与其学士輒弭相接亦君為渠首明年兼厚君卒而其主鴻嶺君奉藩命治美濃川君自憂服中起屨從東行与有力焉婦則擢火器長踰歲兼總督会邑相欠主難其人乃抽君試之一年為真安永戊戌從鴻嶺君祇役東都明年謝病辭職不聽又軼萩邸考績有効特賜佩刀天明壬寅又從東行鴻嶺君既告老因今主委任倍重執政前後十数年邑無稅政邸無愆滯省費貞利懲奢尚俟輔弼功実弗尠天明乙巳偶羅疾 一主憂戚殊甚使侍医日省起居且誓御訊疾藥餌併進疾大漸氣息奄奄猶且加礼服為人扶以拜其辱遂以四月十七日卒于官令五十一葬金澆山先塋地 二主痛惜不已命侍臣弔喪君為人質直不飾豪爽不撓言辭雄厲不可狎侮而至其事父則怡顔柔色惟其所欲其它兄弟同族皆和樂接之交際亦極忠実聞一善揄揚弗措若其不逮邪又能誘掖不已精練時務通徹民情如狀所言則其實行与吏術人無得而問然自非我所親炙不敢容喙其学一遵物家軌加以博綜兼通国史特精韜略至其詩文則余実所与知而其才性所最長者所著嵩山稿<sup>三</sup>可以徵<sup>二</sup>其造詣<sup>一</sup>或惜史事無暇不能炎藻禮一時焉而余則以為縱使其才優游飯歲則長門諸先輩亦瞠若其後然亦奈無一事業施時何按狀所言則誰謂之一文士已配新藤氏有三子伯名通



波田兼虎（嵩山）の墓  
（横と裏二面に碑文）

襲祿早夭季兼強繼即請碑銘者女某未嫁銘云以其文邪乃  
 祖典刑具存以其治邪不敢倣乃祖少息秦氏藥邪不知其幾  
 多誰其人文類斯人者碑而銘其德猶是乃祖遺法之遵哉

寛政乙卯春二月

藍泉役觀謹誌

男 兼強建

資料2 与秦士熊書

役 藍泉

自物家学行、貴藩多士之稱、一時彬々、諸国無有踰焉  
 者而足下伯仲、相尋崛起、樹赤幟於文壇、夙擅二陸之

声、僕輩固願執鞭者也、往者假天緣、始接清儀、傾写  
 心醉、寔愜吾願、分袂之際、投以青玉案、君子愛人、  
 大出望外幸其何加、婦後寥寥、無一字謝厚意、真是負  
 心漢、內省慚千耳、頃吾友坂生、婦自貴藩、具聞足下  
 綏履之狀、不勝慰情、顧十數年來、貴藩疹瘵之變、著  
 艾宿儒、天尽奪之、僅遺一倉祭酒、亦既病羸、使人悵  
 悵、嗚呼賢哲之後續熙其業、寔非易易、幸二三貴友如  
 山生澆生者、皆能不墜家声、左提右挈、駸々乎方為進  
 取之計、而足下最先声、高材博學、温雅成德、後來  
 文玷、舍足下其誰、老成典刑、既有所歸、則所以答天  
 寵牖後進者、其任不亦重乎足下尚自愛、勿輕其身、僕  
 家職、比年上洛、屢聞洛儒之說、才学之富、非乏其人、  
 然其所為多不滿鄙意者、因想物翁以後無復物翁、非惟  
 無物翁、隨弘其道、亦鮮其疇、益喜貴藩文運之氣未斷、  
 不遠而復、二三才当其任哉、欣羨欣羨、僕羈家職、不  
 能親灸門下、心旌搖搖夢想嵩山雲耳、巴調一章、聊述  
 鄙懷、齷齪陋語、漫汚高明、幸咲置焉

資料3 贈秦士熊序

役 藍泉

子猛居恒称嵩山秦士熊者、未嘗不嘖々奇賞、歷年長泮、  
 晨夕同舍、足以尽其為人、母論忠實謙損、人無敢問、



即其煦濡相濕、緩急相趨、雖親兄弟、殆不能過、乃子善亦稱其賢、我入泮宮、既會其出、相距殆三十年、泮中猶稱才學、如在當時、以藩富碩儒、与校多子弟、皆以為士熊不可及矣、歲壬辰、余遊長門、始謁士熊、亦惟草遽一遇未遑弥縷、即有玉詩寶、亦不敢意、最後子礼自長門帰、探其囊中、得士熊所作、序若碑者、実始爽然自失云、夫以海内如斯其大、人民如斯其夥、忠信如士熊者何限、雖乃子猛、獨其美、末足以慊我心焉、三都碩學、能說三墳五典、四方才子、或名五行八叉、則雖子善所稱、何在其為奇焉、即雖其詩能窺古人、亦世長其技、往々有焉、独至文則民鮮久矣、余不自揣、忘意、何以能得世長属辞道者、一相当、以聞其說、則死不朽、東自武都、西至崎陽其名斯技者、得頗窺之、或吉屈警牙、務趨其險、或平易冗長、惟安其拙、若奇字佻言、以誇其博、若異說邪論、以陋其陋、誰不敢曰我握隋珠、抱荆璧哉、要亦未達操觚本源、姑左旋右顧也已、今觀士熊所為、未知其勝海内而上之乎否、亦未知其比古人而類之乎否、况一二短冊、固不足以竭其技、何以能定之、惟其從規矩、字典則、篇章有法、句字有度、殆探其源者、而不復同漆桶掃帚、事摸索焉、是余所独影嚮也、惟若三子所稱、各得其一、安

知士熊所<sup>二</sup>以士熊<sup>一</sup>、出三者外焉、今往東都、姑表出余所景嚮、以為其貽、或出其囊所藏、以街東都市、則恐爽然自失者、不惟余已、子猛姓本城、子善姓国、子礼姓坂、皆為余先輩、故相字云、四月仲九、

注 古代の學校

資料 4 贈秦子熊 在長門 本城紫巖

一代文章一世豪 交情百歲見綈袍、夜珠光動南溟月、斗氣霜寒北海濤、天地祇憐二子在、風雲孰若双龍高、  
莫言梁苑多詞客、大業千秋属我曹

資料 5 贈秦子熊

白古人間世、偶然達者名、酒狂吾<sup>ニシテ</sup>偃蹇、汝詞賦縱橫、山水知音妙、金蘭把臂英、風雪唯二子、天地一交情

資料 6 次秦士熊贈韓客歌行之韻 紫巖先生遺稿

癸未歲、韓使朝聘、槎經赤闕、隨例貢館淹先生臨矣、士熊從矣、其所唱酬成卷上木、頃者、得之先生之処、閱其詩若文、雄偉宏麗、風々決々歌行一篇誦之殊不覺神疲也、雀躍之餘、卒爾步其韻、以賀盛事、聊泄鄙懷耳、

大東百年昇平日、德輝仁明耀扶桑、冕旒尚久箕子國、  
 遠修朝聘會衣裳、辭命潤色三老客、唱酬幾処競詞章、  
 詞章不競巨艦色、三嶋一望海渺茫、瓊藥玉葩三花樹、  
 光彩陸離赤水傍、朱樓玄室次第起、駕螭載霓仙飄揚、  
 望之金銀雲与水、弱海隔越蓬萊鄉、人非飛仙誰可到、  
 馳車羽輪不可常、韓客愕眙無所謝、千秋此会有輝光、  
 中有碩人儀度寬、考樂實主醫交歛、維此秦子徐子裔、  
 仙姿幻佩蕙与蘭、文章鳳翔又龍躍、或駕白鶴乘紫鸞、  
 千變万態有誰報、木季不当双玉盤、且歌且舞羽衣曲、  
 霓裳隱々似広寒、憶昔東周一蒼生、不論斗筭才与名、  
 仙緣多年瀾城客、凡鳥高蜚雖不成、羽翼心喜大鵬德、  
 未報黃雀黃花情、可愧人間不如鳥、人間難住白玉京、  
 天風吹落旧門卒、夜夜擊析望大清、昔時梅福為仙去、  
 今日蒼生非星精、蒼生駕去嵩山子、或駐嵩山飛瀾城、  
 瀾城一別夢中夢、人世栖々又營營、長挂羅網何由举、  
 六翻垂天君縱橫、凶南戢翼彼高岡、忽降赤水揚一鳴、  
 五彩毛光朝陽色、初日翱翔瑞雲行、可觀東方君子國、  
 殊方弱羽何足争、蒼生雀躍賀盛世、皇和千載仰文明

本城紫巖は叔父に国富鳳山という碩儒の家に就き、勉勵  
 怠らず十七八歳に及び業大に進む。その当時徳山の文化は

未だ開けず、甚だ書籍に乏しかったという。そこで萩に遊  
 び、明倫館に入ろうとして、亡父の本生の家山県氏の猶子  
 となり山県貫治と改称した。宝曆八年（一七五八）始めて  
 明倫館に入る。給費生となり、山根華陽館長を師とし古文  
 辞を切磋す。居る事四年にして、波多兼虎と館を出でて假  
 住いをし寝食を共にし、滝鶴台を盟主として復研究する事  
 一期にして帰郷す。

当時徳山藩の教授などは、有名な師とあれば千里の道を  
 遠しとしないで、直接に足を運んで面接し、自己の研修に  
 専念したものであった。とくに徳山藩は藩主自ら範を示し、  
 有名な書籍の収集に尽力した。須佐の波田氏とも親交を交  
 し、文教刷新に切磋琢磨した気風は、文化高揚の基礎を築  
 いたといつても過言ではない。

本城家文書の中からも、波田氏からの書状が見付かった。  
 須佐の歴史資料館にも波田家文書が残存しているので、今  
 後文書の解説により徳山藩学に対する波田氏の関心につい  
 ても、知ることの出来る日を今後に期待してやまない。

尚参考までに波田重内（兼虎の父）より山県貫治（本城  
 紫巖）宛の書状（本城家古文書）を紹介しておく。

「当月朔日の貴簡到来、拜誦仕候如命頃日は以ノ外の、

雪寒ニテ御座候愈御清福、御勤学被成之由珍重之御事、奉存候猶此上御自愛被成候之段御專要と奉存候次ニ、

於当方私儀も且且勤居、申候しかし此極寒殊外、迷惑仕候將又熊介治右衛門、息災罷居候通御知せ被成、被

下御心入忝奉存候兼て、兩人之者至而御懇切ニ被成、被下御教海をも被成下由、承知仕忝御儀難申尺奉、存

候於此領も折節は書中、を以て御礼奉得貴意答、候処病軀之為躰故乍存知、奉背本意候御容恕奉願、被思召

附御尋被成厚キ御、心入と忝奉存候右御挨拶、御答為可得賢慮如是御座候此外、期<sub>一</sub>后音<sub>一</sub>之時<sub>一</sub>候恐惶謹言

十二月十日

波田重内

尚々いく重にも被思召付、被仰下忝御洩奉存申候、

猶又熊介治右衛門を何分にも、御頼申上候偏に御頼

申上候 頓首

山県貫治様 貴復

参考文献

近世防長人名辞典（注2）

須佐町の石碑と碑文（注1）

徳山市史料 下

〔藍泉文集〕〔紫巖先生遺稿〕

〔防長人物誌〕〔本城紫巖〕

## 須佐町探訪に

### 参加して

会員 桑原安子

須佐探訪のことが決定されたのは、六月一日。

爾来橋本、金谷両理事の計画立案により準備が進められた。七月三日現地調査のため会長、金谷、

笹尾、岩本の理事四名が須佐に到り、教育委員会吉田主事と綿密な打ち合せを行なう。

前例に倣い五〇名の募集に対し七〇名の応募があり、折角の申し込みを無下に断わることは如何にも気の毒なのでこの度は六四名に人員を増やし実行することとなった。

唯当日の天気を気にするのみとなった。愈並日、参加者は早目に集合を終え、定刻十分前に出発。

気遣われた天候も国道三二五号線を西北進するに従い、段々良くなり安堵する。十時前須佐大橋にて吉田講師の出迎えを受け、その後は講師の計画に従った。

（岩本）